

来て!見て!知って!文化財

能護寺の十六羅漢

—羅漢図に込めた尊敬と革新— 永井太田1141

妻沼の「あじさい寺」として親しまれている永井太田地区の能護寺は、天平15年(743年)に行基上人が開山し、後に弘法大師空海が再建されたと伝えられています。

現在の本堂は文化11年(1814年)に再建され、内陣に大日如来、外陣に阿弥陀如来が安置されています。堂内に入ると、迫力ある天井画が迎えてくれます。この一格(縦129cm・横120cm)の木板16枚で構成される一連の絵が、熊谷市指定有形文化財「十六羅漢」です。

本図の作者である金井烏洲は、寛政8年(1796)に上野国佐位郡島村(現在の群馬県伊勢崎市)に生まれ、谷文晁に師事し、江戸を中心に活躍しました。本作は円熟期を迎えた安政2年(1855)に描かれた作品です。

十六羅漢とは、釈迦の死後、その仏法を現世にて守り、

衆生を救済するために各地での布教に努めた16人の高弟のことを指します。羅漢とは阿羅漢(梵名のアルハン)の略で、「尊敬を受ける人」を意味しています。羅漢図は、10世紀に我が国へ羅漢信仰が伝来した後に多く描かれるようになり、平安時代の人和絵に含まれる羅漢図を始め、水墨による幻想的な構図を主題とした「禅月様」や、彩色を施した温雅な風情のある「李龍眠様」など西風の代表絵師の名を付けた様式に分類されます。烏洲はこれらの様式を参照しながら、画面全体に広がる強い筆致と緻密な構成力によって十六羅漢を描き、堂内を飾る名作を残したのです。



◆江南文化財センター 048-536-5062(山下祐樹)